

「ふるさと春日井学」研究フォーラム

Forum for Furusato Kasugai Studies

「ふるさと春日井」まちづくりへの応援メッセージ

『ふるさと意識なくして地域の活性化なし』

会報

NO. 59・60 合併

2018.6.23 発行

編集責任者：河地 清

Kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

第59回「ふるさと春日井学」研究フォーラム

テーマ『まちづくりと地域活性化』

一学生の意見で春日井をもっと好きなまちに一

平成30年5月23日（水）中部大学コモンズセンター（不言実行館）において「ふるさと春日井学」研究フォーラムをテーマ：『まちづくりと地域活性化』と題して、河地清氏（本会会長）に講演していただきました。今回は、副題として「学生の意見で春日井をもっと好きなまちに」を設定して、中部大学の学生を対象にフォーラムを企画してみました。中部大学は春日井市に所在する唯一の人文・社会・工学各学部を擁する総合大学です。学生数11,000人が在籍し、春日井市の学術・知性のセンターとして地域に貢献されています。今回のフォーラムは大学内の組織である「コモンズセンター」の企画によるものとなりました。学生が企画し運営してゆくというものです。フォーラム参加者は、21名でした。市議員林克己氏、市企画政策課課長代理西川氏の参加もありました。



中部大学コモンズセンターでの講演の様子

貴重な2名の参加学生

—発表要旨—

「まちづくり」の具体的な取り組みとして、鳥居松エリアの商店街が今取り組んでいることを紹介しながら、この取り組みが、まちづくりの本質的発想に基づく実践であることを伝える内容でした。「まちづくり」の本質は、その地域にしかない、歴史、文化、自然を基本的なベースとして、その地域にしかない遺産（Heritage）を価値あるものとして活用しながら活性化を進めることです。鳥居松商店街振興組合が7年前から取り組んでいる「街角メッセージ」の書道作品の街灯への貼付は、行政が予めから標榜している「書のまち春日井」のコンセプトに合致したものであり、小野道風生誕伝説以来根付いた当地域の書道文化という遺産を生かした理にかなった本質的取り組みとして、評価できるものです。

学生の意見で春日井をもっと好きなまちに

『まちづくり』と地域活性化
—鳥居松町のまちづくりを中心に—

日時：平成30年5月23日(水) 15:30 ~ 17:00
会場：中部大学コモンズセンター (不言実行館 2F)
講師：河地 清さん (「ふるさと春日井学」研究フォーラム会長)

今年、広小路商店街、鳥居松本通商店街のエリアの街灯へも拡大して「街角メッセージ」のステッカーが貼られており、今後は、駅前商店会エリアへも拡大してゆくということだそうです。「書のまち春日井」は春日井の文化的 DNA であり、市民のアイデンティティーにもなっていると言えるのではないのでしょうか。その意味では、書道文化は春日井の文化的 legacy であり、市民共通の資産と言ってもよいのではないのでしょうか。そして、春日井における文化の「ふるさと」は、「小野道風」であり「書道文化」であることが鮮明になって来ていると言ってもよいのではないのでしょうか。

従来の「まちづくり」の実践では、経済的市場の中で有用であるもののみの価値が評価されてきました。現代社会は

中部大生作成のチラシ

経済的価値のみに依存する「活性化」には、限界があることが認識されはじめました。経済的価値の他に「価値創造」をしなければならなくなったことも今日強く認識されはじめました。従来市場価値として、見向きもされてこなかった、歴史、文化、自然の中に新しい価値の創造をして行こうという発想が生まれてきたことは、大きな歴史の節目でもあり、市民意識の変化の現れであると言うことが出来ます。それが、「ふるさと意識」、「sentimental value」「legacy/heritage」等々有用な価値を見つけて行こうというものです。言い換えればこれらは、地域全体の共有財産 (public property) であり、経済的資産としての価値をもつも

のであることが認識されてきました。

現在は、経済中心主義、市場原理主義への批判をすることよりも、文化・歴史・自然の中にある価値を再発見し、経済効果を創造する方法を考える時代が到来していると言えます。

春日井市の「スポーツ・文化都市宣言」が、「書のまち春日井」に相応しいスローガンになることを一市民として願うものです。
(記録：河地 清)

※今回のフォーラムは、中部大学の学生を対象として企画されたものでしたが、参加学生は、コモンズセンターの学生を含めて3名に止まりやや拍子抜けの感でありましたが、一生懸命呼びかけて下さった、歴史地理学科の大塚俊幸教授には、感謝申し上げます。

尚、後日、受講された古山君（尾張旭出身）、岩田君（富山県南砺波市出身）2名の学生さんから、鳥居松エリアの商店街、活性化取り組みについて見学と話を伺いたいとの申し出が、大塚教授を介してありました。意識ある貴重な学生さんに出会えたことは、今回フォーラムの最大の成果となりました。6/16(土) 地理学実習として、案内することになりました。

中部大学人文学部歴史地理学科学生による 鳥居松エリア（商店街）の調査実習（「地理学」）

6/16(土) AM:9:30JR 春日井駅ロビーに集合。参加者は、大塚俊幸教授、古山君、岩田君3名。案内は、河地 清「ふるさと春日井学」研究フォーラム会長。

集合挨拶の後、大塚先生から、「地理学実習」の一コマとしての「鳥居松エリア」における商店街の様子街並みをみることや活性化の実践をされている組合理事の方達との懇談があることの説明があり、新しくなった駅舎による地域の地理的変化について説明がありました。先生の要望があり、まず駅南側から踏破を始めました。上条城跡、林金兵衛君碑、上条橋、上条用水などの案内。地下歩道通路を抜けて広小路商店街へ向かう。途中駅前商店街の活性化の中心的役割を担っておられる塚田さんのお店（米穀店）を突撃訪問しましたが残念ながら（弘法奉賛会の用事）不在でした。広小路商店街街灯の街角ステッカーとシャッター商店街の街並みを見ながら4月に開店された、老舗「筆匠 ホウコドウ」を訪ねました。福西社長にお迎えして頂きました。「どうしてここに出店されたのですか」という質問に対して、「もともと春日井は書どころであり、「書のまち春日井」を標榜しているところですから、ここで商いをすることは意義のあることと前々から思っていました」との答えがありました。学生さん達は熱心にメモをとりながら聴いていました。店の歴史などの資料を頂いて下街道（鳥居松本通商店街）へ向かいました。交差点左が勝川方面ですが右折して、歴史的風情のある葛谷を通り過ぎて本通商店街の理事加藤さんのお店（キラクヤ）を訪問しました。加藤さんにお話を聴くことができました。プラモデルが好きだという古山君の目が光っていました。話中にお客が2人ほど出入りして日頃の活気が垣間見えました。次に郷土館へ行きました。ちょうど第三土曜日は開館日だったので庭園と座敷の中を見ることが出来ました。天皇

ご小休所、吉田源應の六局屏風駕籠、横井也有の歌碑など鑑賞して、飯田重蔵翁碑のある馬頭観音堂を見ました。この後、鳥居松商店街振興組合の青山理事長、岩間専務理事、鳥居専務理事の出迎えを受けて、鳥居新聞販売店会議室で、昼食をとりながら懇談をいたしました。

「シャッター商店街と言われている割には、思ったよりも人通りは多く、交通量もあり寂しさは感じなかった」（古山君）「大学で書道を履修し、原田凍谷先生に習ったので、街角メッセージの作品添付は、いいアイデアだと感じました」（岩田君）「歩いてもらえる通りにするためには、どういう人に歩いてもらうか、ターゲットを絞って考える必要があるのではないか」（大塚先生）等々の意見がだされました。鳥居専務理事から、「これ以上落ち込むことのないところまできているエリアです。後は住民の意識しだいだと思います。来年に向けてエリア協議会を発足させ、地域住民との協働で歩いて楽しいまちづくりの準備をしたいと思っています。中部大学の若い人達のご協力もお願いしたい。」とのコメントもありました。約1時間の懇談は終了いたしました。勝川弘法市と勝川のまちづくりの実態を見るために、下街道を勝川に向けて出発されました。新鮮で、視角の違う意見が聞けたことは商店街にとって大いに参考になったことと思います。

（記録：河地 清）



JR 春日井駅集合



書道用品専門店ホウコドウ見学



鳥居松商店街振興組合役員の方々との懇談

第 60 回「ふるさと春日井学」研究フォーラム

テーマ『庄内川の源流から下流まで』

一流域の文化と歴史

平成 30 年 6 月 3 日 (日) 市民活動支援センター (ささえ愛センター) において「ふるさと春日井学」研究フォーラムをテーマ：『庄内川の源流から下流まで—流域の文化と歴史—』と題して、加藤 政雄氏(本会会員)に講演していただきました。加藤氏は、本会会員であると同時に、春日井市文化財友の会の会員、名古屋郷土文化会員として、活動をされておられます。「庄内川」は、現在の春日井市、瀬戸市名古屋市守山区志段味を流域として古代から人々の暮らしと共にあった、大切に重要な自然の一部でした。この地域にとって暮らしの中心として、経済、文化、歴史を刻みながら今日に至っていることを再認識し、源流から下流に至るまでの流域の全貌を知ることは大切なことです。ふるさと春日井の文化・歴史・自然の特色を知ることであります。講演は、加藤氏の論文『庄内川の源流から下流まで』（『郷土文化』第七十二巻第二号（名古屋郷土文化会 平成 30 年 2 月 15 日所収）を中心に講演されました。

フォーラム参加者は 17 名でした。



講演する加藤 政雄 氏



会場風景

—発表要旨—



庄内川は岐阜県恵那市山岡町久保原の夕立山 (727m) の西側の麓・中腹から流れる川が源流である。夕立山の中腹の「佐々良木川」の源流から少し上流に「一級河川起点」がある。奈良～室町時代にかけて、寺社、貴族は広大な田畑領地を有しており、その「庄」（庄園・荘園）の中を流れるというところから「庄内川」と名付

けられた。(写真：庄内川源流標識)

岐阜県内の流れは、美濃源氏の土岐氏の支配地であったことに由来し土岐川と呼んだ。時代によって「川」の名前が変化している。①瑞浪市・土岐市・多治見市～瀬戸市・春日井市（旧玉野村まで）では、「土岐川」「大川」「小里川」と呼ばれた。②春日井市旧玉野村・瀬戸市地域は、「玉野川」「定光寺川」と呼ばれた。③名古屋市守山区志段味・吉根では、「玉野川」「大川」「龍泉寺川」と呼ばれた。④春日井市内では、「篠木川」「大川」「龍泉寺川」「勝川」「徒歩川」と呼ばれた。⑤清洲市（旧西春日井郡・西枇杷島町・新川町）流域では、「枇杷島川」「小田井川」と呼ばれた。⑥名古屋市北区では、「味鋤川」と呼ばれた。名古屋市中川区馬場町近辺では、「番場川」、同下之一色町辺りでは、「一色川」と呼ばれた。このように、地域と時代の変遷によって呼称が変化してきている。多治見市から春日井市にかけては、川の兩岸は山の崖には挟まれて川幅は狭く、自然がそのまま残された山紫水明の景観が臨める。岐阜県多治見市市之倉町の境と瀬戸市下半田川町を流れる下半田川に蛇ヶ洞川（庄内川支流）があるが、絶滅危惧種に指定されている「オオサンショウウオ」が生息する。

歴史的には、「小田井人足」について説明があった。「江戸時代のこと、庄内川が増水して危険になると、尾張藩は、名古屋城下を水害から守るため、役人を使わして川向こうの小田井村の堤を切らせることを命じましたが小田井村の人々は、堤を切れば自分たちの家や田畑が大被害を受けるので、表面上は一生懸命働くふりをし、実際には少しも能率を上げずにわざと時間をのばし、ひたすら水がひくのを待ちました。」このような史実から、怠け者を表す「小田井人足」の語が起こったといわれ、「小田井人足」の呼び名は怠け者の代名詞になってしまったと言われている。現在は、小田井の地には遊水地が整備され、庄内川下流域の洪水被害の軽減に寄与している。「十五の森」の人柱伝承悲話も庄内川に纏わる話である。室町時代のこと、現在の春日井市松河戸地区では、雨期になると庄内川が氾濫して田畑がよく水浸しになっていました。村人達がどうしたらこの水害を避けられるのかと途方に暮れていると、そこへ陰陽師が現れ「水神様の怒りを静めるためには、15才になる生娘を人柱として埋めればよい」と告げました。そこで15才の娘をもつ親たちがくじ引きをした結果、庄屋矢野家の娘が人柱に決定しました。悲嘆のうちに棺に入れられた娘は、堤のよく切れる場所に埋められてしまいました。娘はそれから1週間近くも棺の中で生きていて、一緒に入れた鐘を叩く音が地中から聞こえたということです。それからこの地には水害もなくなり、みな美田となって今日に至ったと伝えられています。(記録：河地 清)



(写真)：十五の森石碑

次回 62 回フォーラムの予定 テーマ「飯田重蔵別邸と下街道」平成 30 年 8 月 12 日
(日) pm1:30～4:00 パネリスト：櫻井芳昭氏、近藤雅英氏、河地清氏で行います。